

新訳で読む狄公案あるいは狄判事の物語（上）^{ディー}

那須野 巧

オランダの著名な中国学者であり、外交官として数度にわたり日本にも滞在したロバート・ファン・ヒューリック（中国名・高羅佩）が創作した、^{ディー}狄判事の活躍する探偵小説全十六作品のうち、若き判事の最初の事件を描く『東方の黄金』が、和爾桃子による新訳でハヤカワ書房のポケット・ミステリーに収録された（最新刊は二〇〇八年二月『紫雲の怪』）。

中国では伝統的に官吏の査督、民情の視察、犯罪の捜査のために判事（知事／検察／裁判官を兼務する存在）が私行して謎を解き、裁判で見事な裁きを見せる公案小説の人氣が高く、テレビドラマの娯楽時代劇シリーズも次々と制作されている。ちょうど日本の水戸黄門や大岡政談などに相当するおなじみの物語だ。

ヒューリックは唐の武則天の時代に実在した名宰相の狄仁傑を主人公に、犯罪や裁判にかんする中国の古典小説から

材を取り、西洋のミステリー小説の手法と緻密な合理性で新たに構築した一連の小説を英語で執筆した。物語の展開と謎解きの面白さもさることながら、登場人物の造形、事件の舞台となる中国の都市や背景描写の細部にまで、作者の中国文化にかんする深い知識が反映されていて、ジャッジ・ディーシリーズは、欧米では「中国もの」の小説の定番として絶大な人氣を誇る。英語の原作は数社からペーパーバック版が出ているが、Chicago University Press の新装版が全作品を収録していて入手もしやすい。邦訳の第一作『迷路の殺人』（魚返善雄

ロバート・ファン・ヒューリック著／和爾桃子訳

東方の黄金 ほか



新書判 195頁
早川書房 [1050円]

訳）が、英文の原作の刊行に先駆けて講談社から初めて世に出たのは、一九五一年のことである。著者名は英語読みのヴァン・グーリックとなっていた。一九五三年には中国の白話章回小説の体裁に倣ったヒューリック自身による中国語訳『狄仁傑奇案』（南洋印刷社公司）がシンガポールで刊行され、次いで一九六五年に『東方の黄金』の旧訳にあたる『黄金の殺人』（沼野越子訳）が東都書房から刊行されている。さきの『迷路の殺人』は一九八一年に『中国迷宮殺人事件』と改題、原著の江戸川乱歩の序文を解説として、新たに松本清張の序文を添えて講談社文庫に収録された。

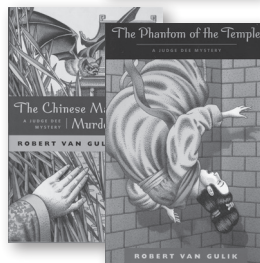
……『狄判事』シリーズ各国版より……



●台湾『狄公案』シリーズ
(臉譜出版)



●中国『大唐狄公案』
(海南出版社・三環出版社)



●アメリカ A Judge Dee Mystery
(The University of Chicago Press)

狄判事の物語が日本の読者に広く知られるようになったのは、一九八九年になつて『中国梵鐘殺人事件』(松平いを子訳)、『中国黄金殺人事件』(大室幹雄訳)、『中国湖水殺人事件』(大室幹雄訳)、『中国鉄釘殺人事件』(松平いを子訳) 初期作品全四冊の選集が三省堂より一氣に刊行されてからである。ハードカバーのかなり凝った装丁デザインの本で、評者もこの選集で狄判事を知り、唐代の都市を舞台にした知的ミステリーを大室幹雄の解説とともに大いに楽しんだひとりである。その後、松平いを子は『中国迷路殺人事件』の改訳であることを除

く、他の九作品はいずれも新シリーズから初めての邦訳。今後は未訳作品の新訳と既刊の改訳とを交互に進められる由である。ほぼ時を同じくして台湾においても臉譜出版から全作品の中文訳「狄公案」シリーズ(繁体字/縦書、巻ごとの分担による共訳)が刊行され、二〇〇六年には大陸でも海南出版社と三環出版社が合同で全作品の漢語訳(簡体字/横書)を収録した『大唐狄公案』と題する新装版(四巻本)を再刊した。ただし大陸の漢語訳は八十年代に行なわれた複数の訳者による共同翻訳である。こうしてヒューリックの創作した狄公案を日本語と中国語の新訳で楽しめるようになったのは何より嬉しい。原作の刊行順に邦訳と中文訳のタイトル一覧を掲げておく。

『狄判事』シリーズ作品一覧

(1) The Chinese Maze Murders (1952)

『迷路の殺人』 魚返善雄訳、大日本雄弁会講談社(一九五一年)／『中国迷宮殺人事件』(改題) 魚返善雄訳、講談

- 社文庫（一九八一年）／『中国迷路殺人事件』松平いを子訳、ちくま文庫（一九九五年）／狄公案⑩《迷宮奇案》姜漢森・姜漢椿訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (2) *The Chinese Bell Murders* (1958)
『中国梵鐘殺人事件』松平いを子訳、三省堂書店（一九八九年）／狄公案⑤《銅鐘奇案》申霞・姜逸青訳、臉譜出版（二〇〇一年）
- (3) *The Chinese Gold Murders* (1959)
『黄金の殺人』沼野越子訳、東都書房（一九六五年）／『中国黄金殺人事件』大室幹雄訳、三省堂書店（一九八九年）／『東方の黄金』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1804（二〇〇七年）／狄公案①《黄金奇案》陳海東訳、臉譜出版（二〇〇〇年）
- (4) *The Chinese Lake Murders* (1960)
『中国湖水殺人事件』大室幹雄訳、三省堂書店（一九八九年）／狄公案③《湖濱奇案》季振東・康美君訳、臉譜出版（二〇〇一年）
- (5) *The Chinese Nail Murders* (1961)
『中国鉄釘殺人事件』松平いを子訳、三省堂書店（一九八九年）／『北雪の釘』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1793（二〇〇六年）／狄公案⑫《鐵針奇案》張宏訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (6) *The Red Pavilion* (1961)
『紅樓の悪夢』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1752（二〇〇四年）／狄公案⑥《紅閣子奇案》梁甦・王仁芳訳、臉譜出版（二〇〇一年）
- (7) *The Haunted Monastery* (1961)
『雷鳴の夜』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1729（二〇〇三年）／狄公案④《朝雲觀奇案》印永清訳、臉譜出版（二〇〇一年）
- (8) *The Laquer Screen* (1962)
『漆屏風殺人事件』松平いを子訳、中公文庫（一九九九年）／狄公案②《漆畫屏風奇案》黃綠善訳、臉譜出版（二〇〇一年）
- (9) *The Emperor's Pearl* (1963)
『白夫人の幻』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1789（二〇〇六年）／狄公案⑨《御珠奇案》朱振武訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (10) *The Willow Pattern* (1965)
『柳園の壺』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1774（二〇〇五年）／狄公案⑬《柳園圖奇案》金迪・李振宇訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (11) *The Monkey and the Tiger* (1965)
[中編集]
狄公案⑮《斷指奇案》徐斐訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (12) *The Phantom of the Temple* (1966)
『紫雲の怪』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1809（二〇〇八年）／狄公案⑪《紫雲寺奇案》張弘訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (13) *Murder in Canton* (1966)
『南海の金鈴』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1781（二〇〇六年）／狄公案⑭《廣州奇案》韓忠華訳、臉譜出版（二〇〇二年）
- (14) *Necklace and Calabash* (1967)
『真珠の首飾り』和爾桃子訳、ハヤカワ・

ミステリ 1698 (二〇〇一年) / 狄公案⑧《玉珠串奇案》金昭敏訳、臉譜出版 (二〇〇一年)

(15) *Judge Dee at Work* (1967)

『五色の雲』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1763 (二〇〇五年)「短編集」／狄公案⑩《太子棺奇案》胡洋訳、臉譜出版 (二〇〇二年)

(16) *Poets and Murder* (1968)

『観月の宴』和爾桃子訳、ハヤカワ・ミステリ 1744 (二〇〇三年)／狄公案⑦《黑狐奇案》陸鈺明訳、臉譜出版 (二〇〇一年)

ヒューリックは中国の白話章回小説のスタイルに倣い、初期作品では各章の始めに「回目」と呼ばれる二行の演題を英語でつけている。邦訳でも中文訳でもこれを白話小説仕立てに翻訳しており、その格調がまた見事。たとえばシリーズの発端となる重要なエピソードが語られる『東方の黄金』第二章の回目の英文を見てみよう。

A strenuous sword duel is broken off undecided; four men drink wine in the hostel of Yen-chow (激しい剣の応酬は引き分けに終わり、四人の男は燕州の宿で酒を飲む)

日本語訳は参考までに評者が仮につけたもの。セミコロンで区切って対句風になっているものの、英語では字数や音節を揃えるのもちろん至難の技だ。和爾桃子の新訳では、日本語として対句ふうになるように漢字かな交じり十一文字の対でリズムと字数をきっちり揃えている。

勝負つかずに白刃を引き
イエンチョウ
燕州の宿舎で杯を交わす

次に本家の中文訳では当然ながら七文字の完璧な対句をなす。

比武藝雨龍顯威
會俠士狄公納才

(武芸を競えば雨龍がその威を発揮し
俠客に会って狄公はその才を受入る)

中文訳はいわば章回小説の回目を復元する作業なのだが、内容は英語の表現を離れたかなりの意識となっている。回目

の訳にかんして言えば、中文訳よりも日本語訳のほうが原文の英語に忠実に、しかも中国小説の回目の対句の風格をも表現しようとした工夫が見て取れる。

ところで中国大陸出版の漢語訳では、回目が省かれてしまっているばかりでなく、章立ても原著とは大きく異なる。原作の人物配置やストーリーを踏まえてはいるものの、本文の至る所に英語の文章表現をまったく尊重していない脚色や創作の部分が多きに多く、原作の緻密な構成を軽んじ、著者の中国文化に対する深い理解にも敬意が感じられないことは残念でならない。大陸の読者で英文の原作を参照する機会のあるひとは稀であろうから、原作に忠実でしかも風格ある台湾刊行の中文訳が、大陸でも新訳として出版される日が来ることを切望する。

さてさて、狄判事の活躍する小説の本文では、はたしていかなる翻訳上の工夫がなされているのでありましょうか、まずは次の回での分解をお聴きください。

(なすのたくみ 中国語教師)